



壁のない店

鹿児島情報高等学校 2年

前田 茉穂

「いらっしゃい」

昔ながらの引き戸を開けると、すぐに店の奥から八十歳とは思えぬ威勢のいい声が聞こえる。五十年以上も続く食堂を夫婦で切り盛りする叔父の声だ。カウンターとテーブル席が四つの狭い店だが、いつもお客様で席は埋まっていた。取り敢えず、空いている席に座ると、接客担当の叔母ではなく、確かにお客様であるはずの女性が、お茶を運んで来てくれた。私が驚いて叔母の方を見ると

「足が痛から、加勢をしてくれちよるよ」

と当たり前のようすに座っている。店の中を見渡すと他のお客様も自分でお茶を入れていた。セルフサービスと考えれば普通だが、この店に居るお客様は、全員常連なのか？

店の戸が開き、一人の男性のお客さんが入つて來た。威勢のいい叔父の声が響くと、すぐに先程とは違う女性が席へ案内した。男性も不思議そうな様子だったが、メニュー表に視線を移し、注文しようと顔を上げた。叔父が奥から声をかけた。

「お客さん、ラーメンでいいですか？」
すかさず、他のお客さんが言う。

「私も今日、初めて來て食べたけど美味しいですよ。ここ ラーメン。」

男性のお客さんは驚きながらも笑つて、ラーメンを注文した。その後は男性も他のお客様や叔母と、初対面とは思えぬ雰囲気で談笑しながら楽しく食事をして帰つて行つた。何とも言えない光景に温かさを感じた。よく見てみると、ここに居るお客様のほとんどが一人客で、その一人一人に叔父と叔母は家族のような声かけをしていた。初めは無表情だったお客様も次第に打ち解け、話し始める。そして、いつの間にか店を手伝つている。思わず笑つてしまつたが壁がないこの店に居心地の良さを感じて、初めて來た人も違和感なく振舞うのだろう。

叔父が亡くなり店は閉じてしまったが私の中には、壁を作らない心が残つている。

(審査評) コロナ禍において心の温まる作品に出会いました。「いらっしゃい」から始まるオープニング、ある男性客のエピソード、そして今ではお店が無いが作者の心に残つていてというクロージングまでのストーリーラインもよく組み立てられており、あつという間に読み終わつた印象です。また、お店の情景がまるで目の前に現れたようにイメージできる描写力には脱帽しました。殺伐とした現代により多くの人にこの作品を知らせたいという気持ちに駆られました。

酒井久美子